

原発性上咽頭結核の1例

嶋田亜希子 大下 祐一 木下 隆 力丸 徹
相澤 久道

要旨：〔背景〕上咽頭結核は、抗結核薬の登場後いったんは激減したが、近年になり診断法の発達とともにその報告例は少数ながらも増加傾向にある。今回、われわれは、肺に結核病変のない原発性上咽頭結核の1例を経験した。〔症例〕症例は74歳の女性。めまい、左側頸部腫瘍を主訴とし、当院の耳鼻科を受診。鼻咽腔ファイバーにて、上咽頭に隆起性病変が認められ、同部位の生検より乾酪壊死を伴う類上皮細胞肉芽腫が検出された。全身検索の結果、肺に結核病変は認められず、原発性上咽頭結核と診断した。抗結核薬による化学療法（INH, RFP, EB）を施行し、投与4カ月後には内視鏡上、病変部の改善が認められた。〔考察〕文献的に、本邦での上咽頭結核は20～40歳代の女性に多く、本症例は高齢者であり、また、頸部リンパ節結核の合併もみられ稀な症例と考えられた。

キーワード：原発性上咽頭結核、頸部リンパ節結核、高齢者

はじめに

肺結核に続発する咽頭結核は昭和30年以前には決して少なくなかった。しかし、有効な抗結核薬が開発されて以降は、咽頭結核の報告は、国内・外を問わず非常に少なくなった¹⁾²⁾。また、肺に結核病変のない原発性咽頭結核の報告例はさらに数少ない¹⁾。今回われわれは原発性上咽頭結核の1例を経験したので報告する。

症 例

症 例：74歳、女性。無職。

主 訴：めまい、左側頸部腫瘍。

既往歴：50歳時に高血圧、69歳時に脳血栓症。

職業歴：主婦。

喫煙歴：なし。

生活歴：特記事項なし。

現病歴：2002年7月下旬よりめまい、左頸部腫瘍が出現。近医耳鼻科を受診し、鼻咽腔ファイバースコープにて上咽頭に隆起性病変を認めた。生検により乾酪壊死を伴う類上皮細胞肉芽腫が検出され、上咽頭結核と診断された。8月28日、精査加療目的にて当科紹介、入院

となった。

入院時現症：身長141 cm、体重43 kg、体温36.3℃、血圧118/84 mmHg、脈拍66/分・整、眼瞼結膜貧血なし、眼球結膜黄染なし、口腔内所見異常なし、左上頸部に最大φ30 mm大のリンパ節腫大とその他両側頸部にφ5～15 mm大のリンパ節を数個触知。心音・呼吸音ともに異常なし、腹部所見・神経学的所見異常なし。

入院時検査所見（Table 1）：炎症所見はCRP1.04 mg/dl、ESR35 mm/hr、と軽度亢進し、ツベルクリン反応は中等度陽性であった。また、喀痰抗酸菌塗抹陰性、抗酸菌4週培養陽性（1コロニー）でPCR法にて結核菌が同定された。しかし、検体の鏡検所見にてダストセルはみられず、下気道分泌物よりも上咽頭浸出液が示唆された。薬剤感受性検査の結果では耐性はみられなかった。また、鼻汁の結核菌PCR検査は陰性であった。

鼻咽腔ファイバー所見：上咽頭後壁は発赤腫脹し正中部に隆起性病変が認められた（Fig. 1）。

画像所見：胸部単純X線写真上（Fig. 2）、明らかな異常は見られなかった。頭頸部CTにて咽頭後壁正中部から内腔に突出する隆起性病変を認め、同部位は均一に造影されていた（Fig. 3）。また両側の上～中深頸リンパ節、

Table 1 Laboratory data on admission

Hematology		Biochemistry		PPD test
WBC	5600 / μ l	GOT	18 U/L	35 $\times$ 28 mm
RBC	432 $\times 10^4$ / μ l	GPT	13 U/L	35 $\times$ 28 mm
Hb	12.3 g/dl	LDH	223 U/L	
Ht	37.5 %	ALP	735 U/L	Sputa examination
Plat	25.2 $\times 10^4$ / μ l	γ -GTP	34 U/L	smear: negative
		CHE	105 U/L	culture: positive
Blood gas analysis		T. Pro	6.77 g/dl	1 colony
pH	7.43	Alb	3.59 g/dl	PCR: <i>M. tuberculosis</i>
PaO ₂	91.0 mmHg	T. Cho	205 mg/dl	
PaCO ₂	39.7 mmHg	T. B	0.46 mg/dl	Nasal discharge examination
BE	+ 2.0 mM/L	BUN	10 mg/dl	PCR: negative
HCO ₃ ⁻	26.2 mM/L	Crea	0.73 mg/dl	
SAT	97.2 %	CRP	1.04 mg/dl	
Erythrocyte		Na	142 mEq/l	
sedimentation rate		K	3.6 mEq/l	
ESR	35 mm/1hr	Cl	107 mEq/l	

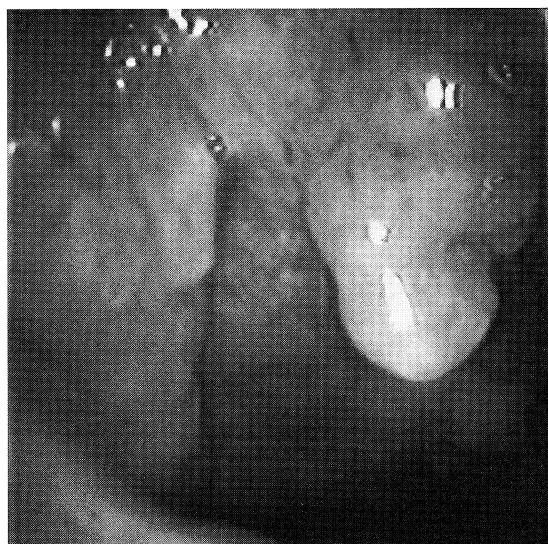


Fig. 1 Nasopharyngolaryngoscope disclosed a nasopharyngeal polypoid lesion.

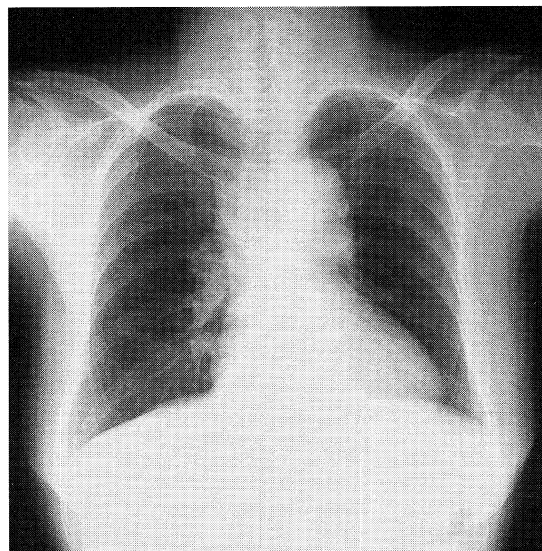


Fig. 2 A chest X-ray film was normal on admission.

副神経リンパ節が多数腫大していた。

病理組織所見：H-E染色で乾酪壊死を伴う類上皮細胞肉芽腫を認め、一部にはラングハンス巨細胞が見られた (Fig. 4)。また、Ziehl-Neelsen染色では組織中に抗酸菌は証明されなかった。

入院後経過：入院後、上咽頭の他に肺、耳、鼻腔等の結核病変の有無を検索したが明らかな病変は見られなかったことから、頸部リンパ節結核を伴った原発性上咽頭結核と診断した。診断後、抗結核剤化学療法 (INH 300 mg, RFP 450 mg, EB 750 mg) を開始した。治療後、4カ月目には上咽頭の隆起性病変の改善がみられた (Fig. 5)。なお、抗結核剤投与による副作用は見られなかった。その後、増悪所見なく、計12カ月間の化学療

法にて治療を終了した。

考 察

結核の化学療法が普及する以前は、咽頭結核は肺結核の末期病変として多数存在していた。しかし、化学療法の普及後、肺結核自体が減少し、その結果、咽頭結核は昭和30年代以降激減した。

本邦における上咽頭結核は、われわれの検索しえた範囲では、抗結核剤の登場以降で約30例が報告されている^{1)~19)}。内訳は男性7例、女性23例と女性に多く、年齢は20~40歳代に集中している。上咽頭結核は続発性と原発性とに大別され、その続発性の頻度としては、剖検例における肺結核症例の24例中18例 (75%) に上咽頭

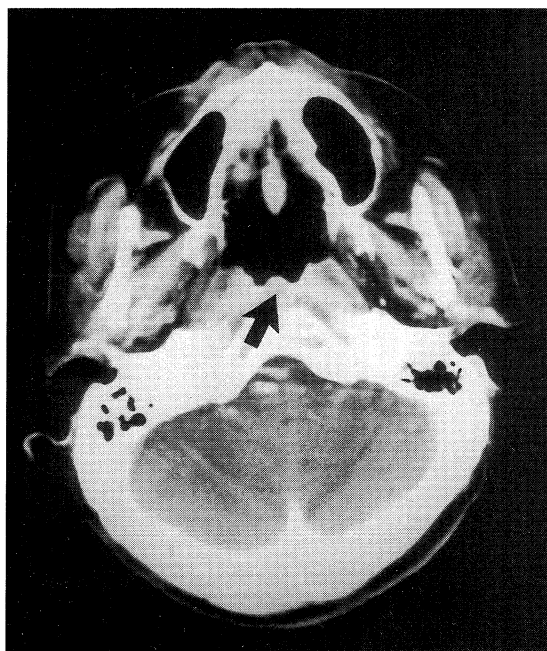


Fig. 3 A cervical CT scan showed a nasopharyngeal polypoid lesion (black arrow).



Fig. 4 The pathologic finding of the polypoid lesion epithelioid cell granulomas with caseous necrosis and multinucleated giant cells consistent with tuberculosis. (hematoxylin-eosin staining, $\times 10$)

結核を合併していたと報告されている²⁰⁾。続発性の感染経路としては管内性、血行性、リンパ性などがあげられる。一般的には続発性上咽頭結核の多くは肺からの管内性感染による二次的なものと考えられている^{21) 22)}。

本症例は原発性の上咽頭結核と考えられるが、本邦では1977年に平出らが原発性上咽頭結核3例を報告して以来、現在まで13例(自験例を含む)の報告がある^{1)~3) 5) 6)~9)}。そのうち7例は1990年以降の報告で、診断技術の進歩に伴い、やや増加傾向にあると考えられる。

Martinsonは原発性の病因について、①小児期にアデ

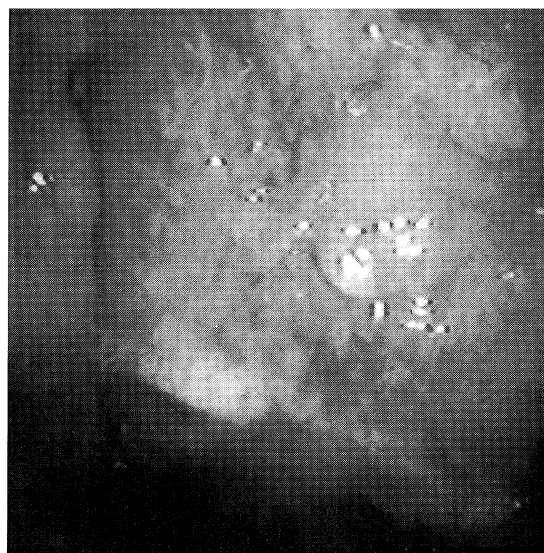


Fig. 5 The polypoid lesion disappeared after a course of anti-tuberculous chemotherapy.

ノイドに潜伏していた結核菌が臨床化すること、②結核菌の吸入による直接感染、③不明な結核病巣よりの血行性感染などを考察している²³⁾。当症例は本症には稀な高齢者であり、外因性より内因性再燃が考えやすく、上記の①や③などの病因が示唆された。

また、主訴は耳閉感、難聴、耳鳴り、耳漏、めまいといった耳症状が最も多く、その他としては鼻閉、鼻汁等の鼻症状、頸部腫瘍、咽頭痛などである^{12) 13)}。上咽頭結核は非常にまれではあるが、その症状は内科医の日常診療においてもしばしば遭遇するため注意が必要である。また、本症例には頸部リンパ節結核を伴ったが、文献的にも同様の症例が3例みられた(Table 2)。

次に、上咽頭結核の診断に関しては、ツベルクリン反応、血沈などの検査は有用ではあるが、やはり確定診断には結核菌の培養検査や生検による組織診断が必要となる。しかし、鼻汁や咽頭粘液の菌検査による結核菌陽性率は低く¹⁵⁾、われわれの検索しえた範囲を集計すると、鼻汁や咽頭粘液の結核菌陽性例は14例中8例(57%)であった^{8) 11) 15) 16) 18) 19)}。一方、生検による病理組織診断例は14例中13例(92%)で^{8) 9) 11)~19)}、病理組織診断は迅速かつ診断率が高く、悪性疾患などの否定も可能であることから有用な検査法と考えられる¹²⁾。近年、組織を検体として直接結核菌を検出する遺伝子診断法(PCR法)がなされ診断の迅速化に役立つとの報告もあるが¹⁵⁾、実際PCR法を施行された症例は数少なく、また、上咽頭ぬぐい液のPCR法を実施された2症例¹⁸⁾と自験例の鼻汁でのPCR法はいずれも陰性であった。

上咽頭結核における明確な治療指針はなく、本症例の

Table 2 Reported cases of primary nasopharyngeal tuberculosis in Japan

No.	Age	Sex	Chief complaints	Cervical tuberculous lymphadenitis	Author
1	37	M	Hearing impairment, abducens nerve paralysis	—	Hirade, 1977
2	13	F	Nasal bleeding, nasal obstruction	—	Hirade, 1977
3	63	F	Hearing impairment	—	Hirade, 1977
4	44	F	Nasal obstruction	—	Imoto, 1981
5	51	F	Ear noises	—	Kita, 1982
6	45	F	Pharyngeal pain, nasal obstruction, ear fullness	—	Nakayama, 1988
7	47	M	Cervical mass	+	Ohhashi, 1991
8	44	F	Pharyngeal pain	—	Yumiyoshi, 1995
9	24	F	Hearing impairment, ear fullness	—	Miyano, 1995
10	31	F	Pharyngeal pain	—	Ishizuka, 1996
11	33	F	Ear fullness	—	Ishizuka, 1996
12	36	F	Cervical mass	+	Ishizuka, 1996
13	74	F	Cervical mass, vertigo	+	Present case

治療は過去の文獻的な治療例を参考に、抗結核剤3剤 (INH, RFP, EB) による化学療法を行った。治療後約4カ月で上咽頭病変部の著明な改善が認められ、一般的には同上の治療方針で予後は良好と考えられる。しかし、発見が遅れて重症化した報告⁴⁾もみられ、上咽頭結核も肺結核と同様に、原則としてINH, RFP, EB (SM) PZA4 剤での化学療法を推奨すべき^{24) 25)}と考える。

文 献

- 北 真行, 森 弘: 最近経験した上咽頭結核治療例—その他の過去5年間における耳鼻咽喉領域の結核症8症例について—. 耳鼻臨床. 1999; 75: 10.
- 中山杜人, 名取雄司, 吉沢正文, 他: 胸部に異常を認めなかった上咽頭結核の1例. 結核. 1988; 63: 185-188.
- 平出文久: 最近の耳鼻咽喉科領域の結核症. 耳喉. 1977; 49: 973.
- 井本龍彦, 橋本紘治: 上咽頭閉塞を来した上咽頭結核の1例. 耳鼻. 1981; 27: 592.
- 坂本邦彦, 松山博文, 内蘭明裕, 他: 上咽頭結核の1例. 日耳鼻第11回南九州合同地方会. 1985.
- 大橋一正, 窪田哲昭, 海野博之, 他: 菌を検出し得た上咽頭結核の1症例. 神奈川医学会雑誌. 1991; 18: 318.
- 弓立史善, 石丸咲恵, 義沢雄介, 他: 上咽頭結核に伴ったバザン硬結性紅斑様結核疹の1例. 臨皮. 1995; 49: 321-323.
- 石塚洋一, 高山孝治, 前田秀彦, 他: 原発性上咽頭結核. 耳喉頭頸. 1995; 67: 800-801.
- 宮野龍太, 中島庸也, 森山 寛, 他: 癒着性中耳炎を伴った上咽頭結核の1症例. 耳展. 1995; 38: 58-63.
- 西村啓三, 久保正治, 三木祐一郎, 他: 最近経験した上咽頭結核と口蓋扁桃結核の2症例について. 南大阪医学. 1993; 41: 171-175.
- 榎本冬樹, 齊藤秀樹, 安藤一郎, 他: 上咽頭結核例. 耳鼻臨床. 1996; 89: 321-325.
- 江崎裕介, 中井義明, 大橋淑宏, 他: 陳旧性上咽頭結核例. 耳鼻臨床. 1992; 85: 227-231.
- 西崎和則, 斎藤龍介, 金谷 真, 他: 上咽頭結核の1症例. 耳喉頭頸. 1991; 63: 35-38.
- 川原孝文, 宮口 衛, 石田京子, 他: 結核性中耳炎を併発した上咽頭結核の1例と文獻的考察. 日耳鼻. 1990; 93: 1222-1226.
- 牧石千晶, 八田千広, 深澤啓二郎, 他: 中耳結核をともなう上咽頭結核例. 耳鼻臨床. 1997; 91: 1231-1235.
- 石井彩子, 小島博己, 宮崎日出海, 他: 中耳・上咽頭結核の1例. 耳展. 2001; 44: 481-486.
- 堀内長一, 吉田高史, 小勝敏幸, 他: 上咽頭結核の1例. 耳展. 1999; 42: 519-524.
- 小川 益, 生井明浩, 池田 稔, 他: 上咽頭結核の2例について. 耳鼻咽喉臨床補冊. 1999; 103: 12.
- 小高 学, 石井晴之, 藤田 明, 他: 両側性難聴にて発症した上咽頭・中耳結核の1例. 結核. 2000; 75 (2): 127.
- Hollender AR: The nasopharynx; a study of 140 autopsy specimens. Laryngoscope. 1946; 56: 282-286.
- Chodosh PL and Willis: Tuberculosis of the upper respiratory tract. Laryngoscope. 1970; 80: 679-696.
- 黒住静之, 平田賢三, 杉本嘉郎, 他: 上咽頭結核の1症例. 耳喉. 1976; 48: 681-684.
- Martinson FD: Primary tuberculosis of the nasopharynx in a nigerian. J Laryngol otal. 1967; 81: 229-233.
- 日本結核病学会治療委員会: 「結核医療の基準」の見直し. 結核. 2002; 77: 537-538.
- Joint Tuberculosis Committee of the British Thoracic Society: Chemotherapy and management of tuberculosis in the United Kingdom: recommendations 1998. Thorax. 1998; 53: 536-548.

Case Report

A CASE OF PRIMARY NASOPHARYNGEAL TUBERCULOSIS

Akiko SHIMADA, Yuichi OSHITA, Takashi KINOSHITA, Toru RIKIMARU,
and Hisamichi AIZAWA

Abstract [Background] Although the prevalence of nasopharyngeal tuberculosis has decreased after the wide use of anti-tuberculous agents, recently the number of reports with the disease has slightly increased in accordance with advances in the diagnostic tools. A case of nasopharyngeal tuberculosis without any tuberculous lesions in other organs (primary nasopharyngeal tuberculosis) was reported.

[Case report] A 74-year-old female complained of vertigo and cervical masses, and nasopharyngolaryngoscopy disclosed a polypoid lesion on her nasopharynx. The biopsy from the mass revealed epithelioid cell granulomas with caseous necrosis and multinucleated giant cells consistent with tuberculosis. Since there were no tuberculous lesions in other organs except cervical lymph nodes in clinical examinations, we diagnosed the case as primary nasopharyngeal tuberculosis with tuberculous cervical lymphadenitis. The nasopharyngeal manifestation disappeared after four months chemotherapy with INH,

RFP and EB.

[Discussion] Most reported case of nasopharyngeal tuberculosis were in the young age group. A rare case of old woman complicated with cervical tuberculous lymphadenitis was reported.

Key words : Primary nasopharyngeal tuberculosis, Tuberculous lymphadenitis, Old people

First Department of Internal Medicine, Kurume University School of Medicine

Correspondence to: Akiko Shimada, First Department of Internal Medicine, Kurume University School of Medicine, 67 Asahimachi, Kurume-shi, Fukuoka 830-0011 Japan.

(E-mail: sawa3807@med.kurume-u.ac.jp)